

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 トラフグ

学名 *Takifugu rubripes*

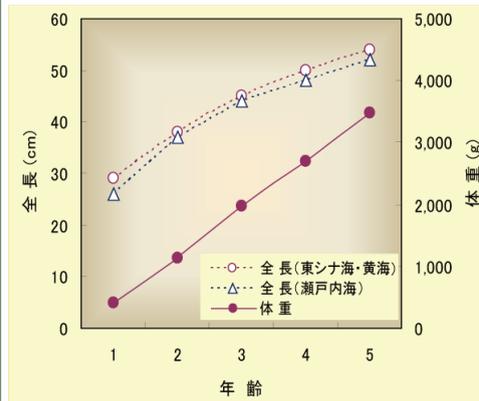
系群名 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所
西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳
 成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
 産卵期・産卵場: 春期(3~6月)、能登島、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸
 索餌期・索餌場: 周年、日本海、東シナ海、瀬戸内海、黄海
 食性: 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成魚以降はエビ・カニ、魚類等
 捕食者: 不明

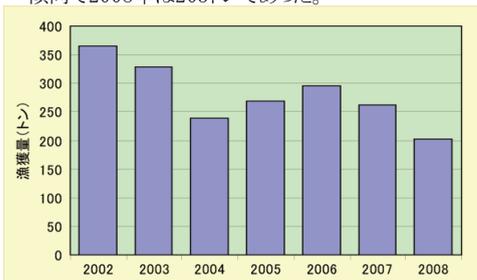


漁業の特徴

産卵場周辺では、3~6月に2歳魚以上が定置網、釣り、敷網によって漁獲され、成育場周辺では、7~1月に0歳魚が定置網、小型底曳網、釣り、延縄によって漁獲され、沖合や水道域では、12~3月に0歳魚以上が延縄によって漁獲される。

漁獲の動向

長期の漁獲量データは存在しない。下関唐戸魚市場(株)における取扱量を長期の漁獲量指標とすると、1971~1993年は610~1,727トンで推移したが、1994年から急激に減少し、1997年以降106~313トンで推移し、極めて低水準にある。漁獲量は2002~2004年に365~238トンに減少後、2006年の295トンまで増加したが、2007年以降減少傾向で2008年は203トンであった。



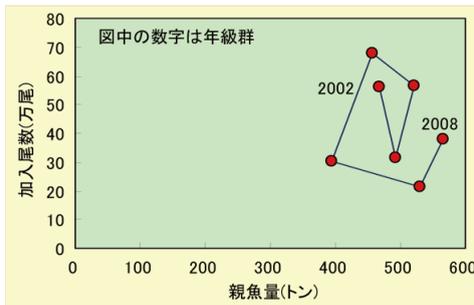
資源評価法

2002~2008年の資源量は、日本海・東シナ海、瀬戸内海(太平洋南を含む)の年齢別漁獲尾数を合算し、自然死亡係数を0.25としてコホート解析(Popeの近似式)により推定した。

資源状態

資源量は2002年の1,277トンから2004年の1,104トンへ減少後、2006年の1,264トンまで増加したが、2007年から減少し、2008年は922トンであった。人工種苗の混入率は平均0.17、添加効率は平均0.04と推定された。資源水準は極めて低位で、2006年以降、産卵親魚量が増加したにもかかわらずRPSが低いまま推移したことが資源動向減少の大きな要因と考えられる。



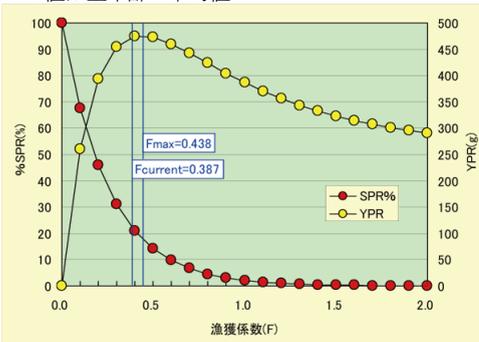


管理方策

2006年以降RPSが低いまま推移したことが資源動向減少の大きな要因と考えられ、今後、低いRPSを反映して親魚量が低下することから資源回復が困難な悪循環に陥ることも懸念される。このことから、漁獲量を緊急に削減し、資源回復に努める必要がある。近年、天然0歳魚の資源尾数は低い水準で推移し、放流0歳魚の資源尾数によって底上げされていることから、資源回復には最適放流への転換による種苗放流の効率化も重要である。

	2010年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	147トン	0.6Fcurrent	0.25	19%
ABCTarget	120トン	0.8・0.6Fcurrent	0.20	15%

- F値は全年齢の平均値



資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、減少
- 2006年以降、産卵親魚量が増加したにもかかわらずRPSが低いまま推移したことが資源動向減少の大きな要因と考えられる
- 人工種苗の混入率は平均0.17、添加効率は平均0.04と推定され、資源を底上げしていると考えられる

管理方策のまとめ

- 漁獲量を緊急に削減し、資源回復に努める必要がある
- 人工種苗は資源量の底上げに貢献していると考えられ、資源回復には最適放流への転換による種苗放流の効率化も重要である

資源評価は毎年更新されます。